



## 親相談のみで不登校児を元気にする法(2)： 不登校児の早期改善と長期改善

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横浜, ミエ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008186">https://doi.org/10.32150/00008186</a>

## 親相談のみで不登校児を元気にする法(2)

### — 不登校児の早期改善と長期改善 —

#### Resolving Truancy Only by Parental Counseling (2)

横浜 ミエ (Mie Yokohama)

帯広子ども研究所

「親相談のみで不登校児を元気にする法」、「1節 親中心のカウンセリングに至った理由」を昨年(平成14年)本紀要21号に掲載して頂いた。今回は、「3節 不登校児の早期改善と長期改善」について私見を述べてみたい。

昨年、不登校のみでなくひきこもり、ADHD、LD児、高機能広汎性発達障害、あるいはその脳の働きなど、子供のみではなく、成人をも含めた様々な研究や実践が成され、それぞれの呼称は違っているが、子供や成人が元気になっていく姿には共通のものがある。

筆者は、現在「親相談のみで子供を元気にする法」を不登校のみではなく、ADHD児、LD児、反社会的行動児、発達障害児などへ、相談の輪を広げつつある。子供が元気になることと障害の改善との関連に強い関心がある。更には、情緒の成長と発達と脳の成長、発達並に働きについても大きな関心がある。この度、不登校児の理解のための拙文を発表させて頂く幸せを多謝しつつ論を進めたい。

(キー・ワード：親相談 不登校)

### 3節 不登校児の早期改善と長期改善

#### 1. 成長・改善の特徴

不登校の子どもの親相談を重ねていると、様々な疑問にぶつかったり、納得のいく答えに出合ったりすることがある。子どもが成長し改善していく年数についても、当初は全く分からなかったが、長年関わっている間に答えが見えてきた。

短期間で学校に行くようになる子ども、7年も10年もの長期を要する子どもと様々である。ここでは短期型・長期型の子どもの成長・改善の特徴について述べていきたい。

##### (1) 短期回復型不登校児

週1回の相談で10回から20回で登校を開始する子ども

##### (2) 長期回復型不登校児

週1回の相談で30回以上かかる子ども

#### 2. 短期型・長期型の違いと特徴

##### (1) 短期型

###### 1) 幸せ年齢が高い

子どもが不登校状態になったとき、殆どの子どもは退行現象として幼児期の状態に戻ってしまうことが多い。0歳まで戻ってしまう子ども、1歳前後の子ども、2歳、3歳、4歳、5歳、6歳と様々である。

3歳前後まで戻ってしまうと、長期になることが

多い。4歳以上であれば余り長期にならないで登校を始めることができる。幼児期への戻り方と子どもの育ちの幸せであった年齢とが、一致することに気付いたのである。

誕生して直ぐ何らの事情で幸せに育っていなかった子どもは、何かのきっかけで学校に行けなくなったとき、0歳の状態まで退行してしまうことが分かってきた。また、5歳から6歳まで幸せに育っている子どもは、何らかのきっかけで学校を休むようになっても、割合早く登校を開始することも分かってきた。

育ちの幸せ年齢が高いということは、乳幼児期の成長の節目をしっかりと越えて育ってきたことになる。子育ての過程で一番大切なことであることも分かってきた。

###### 2) 成長の節目を越えかねている

子どもには成長・発達の節目がある。1歳前後の歩行自立、3歳前後の第一次反抗期、満6才の就学年齢、小学3・4年のギャングエイジ時代、5・6年から始まる第2次反抗期・思春期、そして満20歳の成人という成長の節目がある。

不登校の子どもについて問題になるのは、誕生から満6歳の学齢になるまでの、成長・発達の節目をどの様に越えて育ってきたかということにな

る。来談する多くの親からは「幼児期は手の掛からないおとなしい子であった」と、必ず聞かされる。

おとなしくて手が掛からず良い子であったということは、誕生してから満6歳までの成長・発達の過程で、節目をしっかりと越えてこなかった子どもということになる。手の掛からなかった子どもの多くは、自然な子どもらしさを心の奥の方にしまいこんで、周りの大人に褒められるような良い子として育ってきたのである。

周りに気を使い良い子を演じて生活することに疲れ果てたとき、子どもは無意識本能的に自分を守るために、学校を休んでしまうのである。4歳から5歳ぐらいまでの退行状態であれば、子どもはあまり長期に休まないで登校するようになる。第一次反抗期を越えているかどうかにより、家庭内暴力の有無がはっきりしてくる。

### 3) 成長の節目の切り替えが十分にできていない

子どもが育つ過程で大人が余り過保護、過干渉に接してしまうと、子どもは自分の意思で日常の行動の切り替えができにくく育ってしまう。例えば朝起きたとき、学校へ行かなければならないと思うが、親の強力な援助がないと、自分で切り替えることが出来なくなってしまっている。

切り替えが自分で出来ないことがはっきりしてくるのは、学校に入ってからである。それは、学校には時間割があるからである。先ず登校時間があり1時間単位で授業が進められていく。先生は子ども達個々に切り替えのお手伝いはしてくれない。子どもは全部自分でやらなくてはならない。

不登校になる子ども達は、もともと真面目な子どもが多い。先生の指示通りに全てをやらなければならないと思い込んでいる。また完全にやらなければならないと思っている。次々と新しい指示が飛び込んでくる。要領が悪いので、作業などは他の子よりどうしても遅れてしまう。プライドが高いので、心が傷付いてしまうこともある。

疲れ果ててしまうのである。学校を休むようになったら家庭では、日常生活の中で子どもに出来ることは、自分で決めて行動するように生活するのが良い。子どもに出来ることは子どもに委ねて、大人は暖かく辛抱強く待つことである。切り替えられるようになるというのは母子分離が十分に出来るようになったということである。低学年に多く見られる。

### 4) 幼児期と学童期の変わり目に多い

子どもの心の成長について筆者は次のように押さえている。

- イ 乳児の状態から1歳未満の歩行自立まで
- ロ 幼児の状態から学童の状態に変わる時
- ハ 学童の状態から少年・少女に成長する時
- ニ 思春期を迎える15の春前後
- ホ 青年になる18歳前後
- ヘ 成年になる20歳前後

以上のような過程を経て子どもの心は成長していくと考えている。

実際は子どもの心は上記のようにはっきりと区別されて成長するわけではない。個々の子どもの個性や諸々の条件によって、育ち方が異なってくる。小学校に入学するときになってもまだ、乳児の気持ちを保持したままの子どももいる。学校に入学したからといって、直ぐ次の日から学童の気持ちに切り替えられない子どもも多くいる。

気持ちの切り替えが子ども自身で上手にできない場合は、往々にして学校に行けなくなるときがある。このようなときは、周りの大人が切り替えの手伝いをしてやることにより短期間で元気になって登校するようになる。

### 5) 不登校のきっかけはいろいろである

小学校低学年の子どもが4月の中旬から5月の中旬、運動会の時期などに学校へ行けなくなることが多い。または3年生、5年生の学級分散や新担任になったときに、新環境に対して切り替えができないで不登校状態になる子どもが多い。このような場合は子どもの気持ちに幼児性が保持されたまま成長してきているので、自分一人で気持ちを切り替えることができない状態になってしまうのである。

早期に改善する子ども達に、「なぜ学校へ行かないのか」と問い詰めると、子ども自身もなぜ学校に行けないのか、理由のはっきりしない子どもが多い。更に問い詰めると、子どもは学校でいやな体験をしたことを親に告げる。親は子どもの言うことを信じて、そのいやなことを取り除いてやれば学校に行けるようになると思ってしまう。子どもは条件が揃えばどの様な小さなきっかけでも不登校になってしまう。「帰り道に犬がいる」「男の子が顔を見る」「先生が給食を全部食べなさいと言った」など、大人から見たら理由にならない理由を子

も達は言う。このようなときは大旨気持ちの切り替えが上手にいかない場合が多い。回りの大人の接し方により早く学校に行けるようになる。

## (2) 長期型

### 1) 退行年齢が1歳未満になる

年齢に関係なく子どもが不登校状態になると、気持ちのある部分が赤ちゃん返りをしてしまう。その状態を筆者は「退行年齢」と呼んでいる。不登校状態になったとき、子どもが我慢をして登校を続けてしまい、我慢の状態が強かった子どもほど、退行年齢が低くなってしまふ。

1歳未満の状態まで退行してしまう子どもは、元気になるのに時間のかかる子ども達である。中には新生児の状態まで退行してしまう子どももいる。子どもの退行の状態がどの程度であるかということ、なるべく的確に感じ取ることが、相談者に課せられる大きな課題である。

子どもの退行の状態がほぼどの程度であるか、感じ取ることができたら、後は親と学校の先生方と子どもに具体的にどの様に対応し、接していったら良いかを、子どもの気持ちを中心に考えて取り組んでいくことができる。

子どもの気持ちの状態は、非常にアンバランスな状態になっている。ある面では暦年齢よりずっと大人の感覚で生活をしている。ある面では1歳未満の気持ちの状態で生活をするという毎日が暫くの間続くことになる。退行年齢が低ければ低いほど、親相談の期間が長引くと考えられる。

### 2) 何らかの心的ショックの体験がある

不登校状態が5年以上の長期に渡る場合は、子どもが成長の過程で何らかの精神的な苦痛の体験をしていることが多い場合があることが分かってきた。大きく分けてみると次のようになる。

イ 子どもが可愛がってもらっていた身内の死に遭遇した

ロ 学校の先生による虐待体験

ハ 病気時の強制的母子分離と注射体験

ニ 強力ないじめ体験

ホ 両親の不仲と離婚体験

個々の子どもがどの様なトラウマをもって成長してきたのかということは、周りの大人にはなかなか感知することができない。子ども達は気持ちが安定してきて、元気が出てきて何でも意欲的に

取り組み生活することができるようになってくると、自然に自分はなぜ学校に行けなかったかということをお話してくれる。

長期にわたる子ども達が語ってくれる内容は大人がどれ程謝っても取り返しの付かないほど、子どもの心を痛めてきた内容が多い。

### 3) 情緒的に個性の強い面がある

学校を休み始めて3年、5年、7年、10年とかかる子ども達は、個性の強い子ども達であるように思う。幼いときから家族や周りの人達に、こまやかな気を使う個性がある。時には自分の事は後回しにしても、他人のことを気遣うことがある。

幼児期はおとなしくて手の掛からない良い子として育てている。小学校に入学しても良い子の姿は変わらない。だが実際には周りに気を使い過ぎて、疲れ過ぎてしまっている。表面は良い子であるが、内面は大変しっかりと自分の考えを持っていて、強情なくらい自分の意志を曲げることがない。時には絶対に自分の意志を通してしまふことがある。

子どもらしく振る舞うことがなく、自分の気持ちを内面に押し込んでしまふことが多い。親や家族も子どもの本当の気持ちを分からずに過ごしてしまうことが多い。親にもありのままの子どもらしい甘え方をあまりしないで、我慢をしてしまふことが多い。

学校では表面的なおとなしさの反面、自己中心的で強情な面が見られるので、友達に疎外されたりいじめられる事もある。更には必要以上に我慢して生活するために、気持ちの疲れ方も限度を超えてしまふことがある。

不登校の子ども達は気持ちの疲れを母親に求めて家庭に籠もるようになるので、親子関係が疎遠で放任という事はないので、その点は救われる気がする。反対に親が過保護か干渉傾向にあるといったほうがよいかもしれない。

### 4) 頑張り屋で周囲に気を遣う面がある

3)と重複する内容になるが、不登校になる子どもの多くはとても頑張り屋の傾向にある。例えば学校から宿題が出ると、先生の言ったように完璧にやっていたいかなければならないと思ひ込んでしまふ。何か課題が与えられると、大人のような感覚で取り組んでしまふ。実際には子どもなのでできな

いことがたくさんあるが、できない自分が悪いと思ひ込んでしまうことが多い。

また物事をやる前に失敗するのではないかと思ってしまう。だから日常生活が大変疲れるわけである。さらには非常にプライドが高いので失敗は許されないのである。

学校で頑張った分家庭で存分に開放できる雰囲気がある場合は、不登校児にならないですむが、家庭でも学校におけるように良い子を演じてしまうと、限界にきてしまい、行く行くは不登校になってしまうことがある。

またこの様な性格の子どもは物事をじっくりと考えるので、対症療法的はあまり通用しないので、じっくりと人格が基本から成長するのを待たなければ成らないので、長期に渡ることが多い。

#### 5) いじめがきっかけで不登校になる

改善が長期にわたる子どもの中には成長の過程で、子どもや大人にいじめられた体験のある子どもがいることが分かってきた。この事は母親の初期の相談の中では明らかになってこない。子どもの気持ちが改善されて、様々なことを自己決定することができるようになり、自分の気持ちもしっかりと話すことができるようになった頃、子どもからポツリポツリと話してくれる。

内容を聞くと大人である筆者はいたたまれない程の申し訳ない思いで一杯になってしまう。親も筆者も子どもが話してくれるまで分からなかったという事に、深い悔恨と反省の思いで一杯になるのである。

親相談のとき最近では心して、子どもの心に内在しているトラウマについて、聞き逃したり感じる事ができなかつたなどという相談にならないように心掛けている。子どもの心の傷については大人は非常に鈍感であることを、相談の過程で気付いてきた。

大人は子どもと接するときに、大人の側に立って接するために、大人自身が心が痛まなければ、子どもの心も痛んでいないと思ひ込んでしまうところが、子どもの心を傷つけたり追い込んだりする要因であるように思える。

若い親は父親、母親になっても子どもと同じような気持ちを保持したまま、親になっていることが多い。若い親に対して子どもの親になることを十分に学ぶ時間と場が今は是非必要な時代になっ

てきているように思う。

親に対する子育て支援の輪を、地域にどの様に根づかせていくかという事が、早急の課題であると考えている。各町内の住民の協力がまず必要である。地域に設置されている保育所の役割も大きい。小学校や中学校単位の活動も必要である。

最近のように働く母親が多くなり、子育てがさらに大雑把になる時代には、行政的な取り組みが一層望まれる時代である。具体的に何をしたらよいかを一人一人の大人が考えて、自分のできるところから取り組みたいものである。

### 3. 思春期型不登校

#### (1) 思春期の成長過程に起きやすい

不登校の子どもと多く関わっていると、何となく子どもの心の状態が見えてくるようになるものである。子どもの心から少年、少女の時代に成長していくとき、子どものままでは困るのである。どうしても子ども自身が子どもの節目を乗り越えなければならない。少年、少女時代を越えた子ども達は、次は青年にならなければならないのである。

この当たり前の成長の過程で、現代の子ども達は不登校という節目の越え方を、無意識本能的に選択しているのだと考える。不登校は、だから決して異常な行動ではないのである。それは、子どもが正常に成長するための、一つの成長の姿なのである。

子どもは誕生してから非常に沢山の大小の成長の節目を越えて成長する。その中で大人の目に見える節目と全く目に見えない節目とがある。目に見えるものには1歳前後の歩行自立がある。3歳前後の第一次反抗期がある。小学校入学の節目がある。5・6年生から始まる第2次反抗期がある。そして、思春期真っ只中の15の春の揺れがある。

親も保育や養育や教育に関わる大人は皆、子どもには子ども自身の中に自分で節目を越えて成長していく力があることを、子どもに対して認めなければならないのである。その上で保育や養育や教育が成り立ち必要となってくるのである。

#### (2) 5・6年生から始まりやすい

社会の変化にともない子ども達の成長の内容も、少しずつ変化の過程を辿っている。子どもを取り巻く環境が全て子ども達に良いものばかりとは限らない。子どもの心の成長は停滞したまま、身体

と表面的社会性のみは年齢よりもどんどんと成長をしていく時代になってしまった。

中でも子ども達の第2次性徴期の到来が、早くなりつつあることに注目しなければならない。気持ちは赤ちゃんのままからだ心が大人になってしまうという現象が、どんどん増えつつある。その結果、子ども達は小学校5・6年生になるといじめや不登校や集団生活不応状態になっていくのである。

誕生してから子ども時代をあまりにも大人らしく生活してきた子ども達の多くは、5年生、6年生の思春期の入り口で先ず一休みをして、心身の成長のバランス調整をしなければならないのである。気持ちが赤ちゃんの子どもは、気持ちが成長するまで、不登校の状態を続け、社会性の未熟な子どもは社会性が育つまで学校には行かずに、人格が成長するまで家庭や家族や親に成長のための愛情を貰うことになる。

子どもが学校を休んでいるときは、親や先生は苛々しないでじっくりと成長を待ち続けなければならない。ただ待つのではなく『愛情たっぷり、しつけは根気よく、駄目なものは駄目、そして一緒に遊び、一緒に働いて、待つ』のである。

### (3) きっかけはいじめが多い

子ども達は5・6年生の思春期の入り口に差し掛かると、大人が思いも及ばないような行動を取ることがある。その中でも最近多く聞かれるのが、「いじめ」による不登校である。

実際には本格的ないじめではないが、友達関係の不協和音から発生していじめに発展していく内容が多い。例えば次のような例である。

イ 幼稚園からずっと友達だったのが、修学旅行のグループで外されてしまった

ロ 小学校の1年生から一緒に登下校をしていたが、5年生になってしてくれなくなった

ハ 席替えをしたときに、自分を取ってくれなかった

ニ 頭が良くて先生に可愛がられた

ホ 自分の考えをはっきり言うので嫌われた

この様に見てみるとそれ程重大な事ではないように思えるのだが、子どもの側から見ると大変なことになっているわけである。先生によるいじめもあることを忘れてはいけない。

### (4) 改善の過程が多様である

思春期型不登校児の改善の過程は、改善していくスタイルが一定ではない。個々の子どもに個性があるように様々な改善の道を進んでいく。相談者は子どもがどの様な個性を持っているかという事を明確にしていかなければならない。

5・6年生になると子どもは、学校を休むという事に対して、罪悪感を持つようになる。何とかして休まないで登校しようと努力をしてしまう。その事が二次的な疲れとなって、子どもの心にのしかかるので、改善に時間が掛かってしまう。

また、思春期型不登校というのは人格の成長期に起こるので、子どもの人格が不登校の状態のまま成長していくので、どうしても15の春まで継続してしまう場合が多い。そのことをこの時期の子どもと関わる大人はしっかりと、自覚していないと子どもの気持ちをどんどんと追い込んでしまう結果になってしまうので気を付けるべきである。

どちらかということ、休み休み登校を繰り返し、ついには長期の休みに入ってしまう場合が多い。また、思春期ゆえ反抗期が一次・二次と重なるので、その出方も倍増するので家庭内暴力などと呼ばれることが多くなる。家族の対応も一時的に大変な状態になることがある。

思春期は不登校状態にならなくても、子ども達は様々な揺れを体験する時なので、大人はあまりおろおろしないで、子どもの成長の姿を暖かく見守ってやるのが良い。

### (5) 幼児性を保持している

思春期に差し掛かる頃に不登校になる子どもに共通する状態は、幼児性を保持したまま成長してきたことである。現代の子ども達は暦年齢から3歳引いた年齢だといわれるが実際にはもっと引いても良いように思っている。

子ども達が幼児性を保持しながら成長しているということは、社会性が未熟なまま成長しているということになる。社会性というのは大人になってから身に付くものではなく、3歳には3歳の社会性が育ち、6歳には6歳の社会性が要求される。中学1年生になりながら小学4年生の社会性しか育っていないと、子ども達は不応を起こし不登校になったり、いじめたり、いじめられたり、反社会的行動を取ったりするようになるのである。

幼児性を年齢並の社会性として育てるために

は、大人は何をしたら良いかについて考えてみたい。先ず、子どもの側にいる大人が、子どもと一緒に心ゆくまで遊ぶことである。また、子どもと衣・食・住について一緒に働くことである。

子ども達は登校しているから社会性が十分育っているとは眠らない。学校を休んでいるからといって、社会性が育たない訳ではない。子ども達は「遊び」「働く」事により、社会性が育っていくのである。社会性というのは人間として生きていく力のことである。大人は子どもに社会性を育てる義務と責任がある。

思春期の不登校を、「登校拒否」と決め付けてはいけなさと考えている。子どもの育つ姿だと押さえた方が自然であるように思われる。現代の社会の中で育つ子ども達は、育ちの過程で一度一休みをしなければ、思春期の節目をストレートに越えることができなくなりつつあるのかもしれない。

残念なことだと思うが、大人が余程真剣に子どものことを考えない限り、現代の流れはそのまま続くしかないのではないかと考えている。どこかで子どもの育ちを自然な状態に戻さなければ、日本の社会は崩壊し、日本という国の存在さえ、危ぶまれるようになるのではなからうか。

#### 4. 不登校の改善の過程

##### (1) 幼児返りをする

子どもが不登校の状態になったとき、一番初めに大人に分かることは、幼児のような言動が多くなることである。学校では我慢をしていて表面には出さないが、家に帰ると段々と幼児の状態が強くなってくる。そしてついには学校を休み始めるのである。

では子どもはどの程度幼児に戻ってしまうのであろうか。

- イ 0歳まで戻る～寝てばかりいて甘える
- ロ 1歳まで戻る～好きなことばかりして甘える
- ハ 2歳まで戻る～好きな遊びをしながら甘える
- ニ 3歳まで戻る～だはんをしながら甘える
- ホ 4歳まで戻る～親にまわりつきながら甘える
- ヘ 5歳まで戻る～家族と遊びながら甘える

実際には5歳くらいまでの退行の状態の時は、不登校状態にならずに、一時的に学校を休むことで

終わってしまう場合が多い。

##### (2) 昼夜逆転の生活に入る

不登校の子ども達は不思議なほど一様に、学校を休み始めると昼夜が逆転した生活に入ってしまう。子ども達の生活リズムが乱れ、昼夜逆転の生活に入ってしまったら、周りの大人は昼夜逆転の生活から、子どもが脱皮するまでじっと耐えて待つことしかない。

大人が気を遣い朝起こし続けると、不登校の状態はどんどんと長引いてしまう。子どもは学校を休み始めるまでに、大人には想像も付かないほどの、我慢を重ねて生活してきたのではないかと考える。

いまようやく安心してゆっくりと休むことができるようになったのである。何も言わずにゆっくりと休ませてやるのが一番早く元気になる方法である。子どもはある程度の期間昼夜逆転の生活をすると、不思議なほど普通の生活リズムに戻っていくようになる。

不登校の子どもが学校を休み始め、昼夜逆転の生活に入ったら、もう既に元気になる方向に歩み始めたことになるのである。ここで問題なのは子どものことではなく、大人が子どもの気持ちをどのように理解し、具体的にどの様に対応することができるかという事である。

大人は子どもというものは心の疲れが自然に取れて、必ず元気になるものであるという事を、しっかりと信じて子どもに接することである。子どもとは不思議なほど子ども自身で成長する力を内包しているものである。

##### (3) 反抗期状態になる

昼夜逆転の生活を十分に体験した子どもは、乳児期を卒業するのもかもしれない。日中起きている時間が多くなってくると、ぼつぼつと第一次反抗期の状態が見られるようになる。何を見ても腹がたち当たり散らすようになる。家族の中で子どものことを一番理解してくれている大人に、一番ぶつかっていく。

この様な状態を「家庭内暴力期」と呼んでいる人もいる。実際には子どもの気持ちが幼児返りしているのに、3歳の赤ちゃんが分からずを言って「だはん」をしているような感じである。でも体が大きくなっているので親の対応は大変になってくる。

一般には子どもが成長する過程で、第一次反抗期は終了しているはずなのだが、不登校状態になる多くの子ども達は、第一次反抗期の節目を越えていない子どもが多いことに気付く。子ども達は成長の過程で必要な体験や経験を十分経過しないと、年齢が進んでも必ず幼児期の状態を繰り返すことになる。

子どもが反抗的態度が表出できるようになったら、大変良い傾向なので押さえ付けたり、拒否をしたりしないで十分に受け止めて、存分反抗したい心を発散させてやるのが良い。反抗心というのは子どもの心が自立へと成長を始めた印でもある。大切にしたいものである。

#### (4) 母子関係の充実期に入る

母親に思う存分反抗することが出来るという事は、子どもの気持ちが母親に対して信頼の度合いが深まってきたという事である。母親は子どもに蹴っ飛ばされたり、悪態をつかれたり、時には殴られたりと様々な仕打ちを受けながら、子どもの気持ちをどんどん理解してやれるようになっていくのである。

子どもは母親に反抗の気持ちを存分にぶつけることにより、自分の内面に育ち始めた自我の成長と戦い続けているのである。子どもの心の中に「自分」が育ち始めると、子どもの苛々した反抗の状態も、少しずつつまんでいくのである。母親にとっては一番辛い時期である。母親にしっかりと寄り添って力になる人がいなければ、母親が駄目になってしまう時期でもある。

子どもは母親と全くの一体の状態になり、添い寝もすれば、母親から少しも離れようとしなくなる。ただひたすら母親の愛情を求め続けるのである。別な言葉で言えば「母子関係の充実期」と呼んでもよい。

不登校の子ども達の多くは、表面的な母子関係は大変充実して育ったように見えるが、実際には大人の側に立った愛情が強かったために、子どもの心まで十分に通じていなかった場合が多い。子どもは親の愛情が不足であれば、満足するまで欲しがり、どのような方法でもむしり取るものであることを大人は忘れてはいけない。

#### (5) 室内遊び期に入る

母子関係が充足すると子どもは母親に反抗する

のを止めてしまう。そして、母親の次に大好きな家族に対して反抗的な態度を取り始める。子どもはこのようにして家族全員が、自分を大事に思ってくれているかどうかを確かめる。家族全員が人間として信頼できる状態になったとき、子どもは母親の元を離れて室内で一人遊びを始めるのである。

初めの室内遊びは全くの一人遊びである。テレビを見たりファミコンをやったり、マンガを見たり、ミニカーを転がして遊んだり、ルールのない遊びが中心になる。このようなとき周りの大人は、子どもに遊びの方法を指示的に教えるということをしてはいけない。暖かく寄り添いながら、子どもの楽しさを肌で感じているだけで良い。ところがこの「ただ側にいて」ということが大人にとってはとても難しいことである。

一人遊びが終わると、今度は母親と一緒に遊びたくなる。一緒にテレビを見たり一緒に本を読んだり、簡単なルールのあまりないゲームと一緒に楽しんだりする。まだ母親以外の人とは遊ぶことが出来ない。

母親とたっぷりと遊ぶことにより、人間不信の根本のところ段々とほぐれてきて、人間が好きになっていくのである。子どもが不登校になったのは、母親だけの責任ではないが、子どもを元気に立ち直らせることのできるのは、その子を生んでくれた母親に勝るものはない。

#### (6) 母子分離期に入る

母親を中心とした家族との関わりが良くなってくると、子どもは家族とだけの遊びでは物足りなくなってくる。まだ学校の友達との交流には抵抗があるので、学校と関係のない人達との交流が始まる。

例えば、今まで行くことの出来なかったお店に出掛けられるようになる。だが、学校の友達などに会うことはまだ嫌である。子どもは自分の出来るところから少しずつ、社会に出ていくようになる。ゲーム屋さんであったり、デパートであったり、新聞配達であったり様々である。

母親から気持ちが自立してくると、自分の部屋に友達を呼ぶようになってくる。またこの頃から母親との添い寝も少しずつ減ってくる。母子分離は子どもが誕生してから、長い年月を掛けて行われるものである。不登校の子ども達は、短期間で母



子関係を充足させ、母子分離をしていくのである。

大人は子どもの急速な心の成長についていきかねることが多い。故に、親に対しての専門的な適切な支援が必要になってくるのである。だが、現実には親が十分に相談のできる場や人材が大幅に不足しているのが現状である。不登校児の急増の現状に、全ての大人が心をつなげて取り組まなければならない時代になってきていることを自覚したい。

### (7) 外遊び期に入る

子ども達は家庭内で十分に愛情を貰い、活力を得ると家の中だけでは物足りなくなり、ぼつぼつと外に出始める。まるで1歳前後の歩行自立が始まる頃のように、ある子どもは無鉄砲に、ある子どもは用心深く、家の外に出て探索行動を開始するのである。

外へ出ていくスタイルは子どもによって全く違ったパターンで始まるので、一律に考えない方がよい。ある子どもは家の周辺から練習を始める。またある子どもは、家から一番遠いところから外に出る練習を始めるなどである。

どの子どもも結果的には、自分の家に戻り自分の家から学校や社会に巣立っていくのである。小さい子どもの成長の姿と全く同じである。大人はこの時期を上手に付き合っていかなければならない。決して、大人主導の外遊びにしてはならないのである。子どもが自分で本当にやりたいことを、自分の気持ちで決めて行動するという体験をする時期である。大人は子どもに行動する自由には、義務と責任があることをしっかりと教えてやる時期でもある。

子どもの気持ちはまだ幼いので、時にはとんでもない失敗や、反社会的行動を取ることもあるので、その都度大人は真剣に子どもと一緒に取り組みたいものである。

### (8) 家事手伝い期に入る

家の内外で存分に遊んだ子ども達は自然に、もう少し生産的な行動を取ってみたいくなる時期でもある。大好きな母親に喜んでもらいたくて、家事の手伝いを始めるのもこの時期である。自分で食べるものを作ったり、自分の部屋の片づけを始めたり、風呂の掃除を試みたりと、家事の手伝いが多くなっていく。

家族は、さり気なく子どもと一緒に家事をやるように努めることが大切である。子どもが、衣食住の仕事をほとんど自分でこなせるようになったら、不登校状態もほぼ改善し、終わりに近づいてきたと思っても良い。

この頃になると母親は勿論であるが、家族は子どもが学校を休んでいることを忘れていくような感じで生活していることが多い。その子が学校を休んで家にいるのが当たり前になってしまっているのである。

母親も以前のように、おろおろ、苛々と切羽詰まった気持ちではなく、非常におおらかになっている。このような家族環境の中では、子どもはどうしても自分から逃げるができなくなってしまう。そして、次々と生産的な行動を見つけては取り組むようになってくるのである。

家事手伝いについては、不登校状態を早期に改善する大きな鍵なので、決しておろそかにしてはいけない。家事を沢山やることにより、両手をどんどん使用するために、脳に対しての活動が活発になり、全面発達をうながしてくれるのである。

### (9) 退屈期に入る

子ども達はもう十分に休養をしたのである。母親にも父親にも存分甘える事ができた。家族も全員自分の事を分かってくれた。家の中の遊びも飽きるほどやった。外遊びも自分で満足するほどやった。家事も全部出来るようになった。学校を休んで家にいても、もうあまり楽しいことがなくなってしまった。

母親も時々ちょっかいを出してみるが、以前のように驚いて直ぐ自分のほうを見てくれなくなった。なぜか分からないけれど、退屈で退屈で腹が立つほどである。親に言っても「ああそうなの？」で済まされてしまう。

仕方がないから自分であれこれと何かを捜してみることにする。食べてばかりいたので体重ばかりが増えてきた。という訳で、子ども達は一人で運動を始めるのである。腹筋体操や縄跳びや家庭内マラソンや、ダンベル体操など様々なことに挑戦を始める。

でも、運動だけではどうしても物足りなくて、次は勉強や仕事を始めるのである。この時期に入ったら、周りの大人はあまり喜ばないで、より一層家事の手伝いを頼むようにするのが一番良いことで

ある。

子どもが学校を休んでいる間に、学校へ行っている子どもには、身に付けられなかった衣食住の家事について、完璧なまでに家庭文化の伝承をしておくべきである。

#### (10) 登校準備期に入る

不登校の状態になってから、元気になり学校に行けるようになるまでの期間は、個々の子どもにより異ってくる。だが、元気になる過程はおおよそ皆同じような過程を経て、元気になっていく。

「退屈だ」が出始めると、登校の準備期に入ってくる。子ども達はもう家に籠もっていることに耐えられなくなり、子ども集団の中に戻っていくのである。「子どもは子ども中」という感じである。

子どもはかつての友達のことを思い出し、電話を掛けて呼び出してみたり、友達の家の近くまで出掛けてみたりするようになる。また、中には学校の近くまで出掛けていく子どももいる。

このような状態になってきたら、親は学校の先生と連絡を取り合って、先生にさり気なく家庭訪問をしてもらったり、仲の良かった友達などに電話を掛けてもらったり、遊びに行ってもらったりしても良い時期になってきている。このような配慮を「登校刺激」という言葉で表している人もいる。

原則としては、周りであまり騒がない方が良い。登校するのはあくまでも子どもであるから、子どもの自己決定の気持ちを十分に大切にしたいものである。登校の仕方も個々の子どもにより異なってくるので、大人はあまり焦らない方がよい。

### 5. 学校としての対応

#### (1) 指導的発想では無く子どもの個に立った発想に転換する

教育の場に身を置いている人は、子どもが不登校状態になると、どうしても何らかの指導の手を差し延べなければならないと思いついでしまう。子ども達が教育の場にいらなくなったから不登校になるのである。もう少し詳しく言うと、学校教育の指示、命令、枠組みに適応できなくなって、心身が疲れ果てたために、学校に行くことが出来なくなったのである。この事を一番始めに学校は考えて気付かなければならない。

学校教育の立場から不登校の子ども達を見てし

まうと、他の子ども達は元気で登校してきているのに、何故この子だけが休んでしまうのかということになってしまう。原因は何故かということになってしまう。また、親の養育態度が悪いために、子どもが不登校になってしまったと考えてしまう。

親の子どもへの接し方を変えてもらえば不登校が早く良くなると考えてしまう。この様に、教育の立場や、大人の立場から子どもの気持ちを考えてしまうと、子どもの現在疲れ果ててどうしようもない、辛い気持ちを感じてやる事が出来なくなってしてしまうことになる。

筆者は長い間不登校の子どもとの相談を続けてきたが、子どものことを理解してもらうのに、一番大変だったことは、学校先生方に理解してもらうことであった。

#### (2) 子どもの心理的状況の把握を優先する

子どもが不登校状態になったら、何をさて置いても子どもの側に立って子どもの心の理解を優先する事である。筆者は不登校の多くは子どもが学校で見せるサインにより、未然に防ぐことが出来ると考えている。

子どもが学校を休むという事は大変なことである。普通の状態ではない訳である。学校生活に対して、非常に疲れ果てていることになる。この様な時、親も学校の先生も、ふと立ち止まって子どもの心の側に立って子どもに接したならば、子どもが現在どれ程の疲れがたまっているかということが分かってくるのである。

子どもが不登校になるという事は、子どもの心が疲れ果てて、寂しくて、空しくて、自分ではどうしようもなくなったときに起こるものである。子どもはぎりぎりまで頑張って我慢してきたのである。これ以上無理のできない状態まできているのである。

教育の場にいる人が、子どもの心の側に立って子どもの気持ちをしっかりと理解したならば、子どもが不登校状態になっても、改善の過程が非常に短くて済むことになる。「なぜ登校出来ないのだ」ではなく、「今この子に何をしてやれるのか」という事である。一番は子どもを母親の元でゆっくと休ませてやることである。でも、このような簡単なことを理解してもらうのに大変時間がかかるのが現状である。残念な事である。

### (3) 集団対応では無く個の対応から始める

不登校状態というのは、いじめとは異なり、子どもの個人内で起きることが多い。一人の子どもの不登校の状態を学級や学校で、皆の問題として取り上げて話し合うという事をしてしまうと、不登校の子どもはさらに傷付いて学校に行けない状態になってしまうことがあるので配慮すべきである。

子どもは学校は休んでいるが、気持ち的にはびりびりとした状態で学校のこと、勉強のこと、友達のこと、先生のこと、親のことを考えて苦しんでいることを忘れてはいけない。あくまでも子どものプライベートな問題として関わってやるのが大切である。

だからといって、子どもを放置しておくのは一番いけないことである。子どもの気持ちの現状を的確に把握できるように努力しなければならない。その場合、子どもにとってだれが一番心を許している人かという事を、大人の側ではっきりさせなければならない。

子どもは一番先に母親に分かってもらいたいと思うのだが、母親は学校の先生の次に子どもの心の理解が遅い存在なので、不登校について専門的に相談を出来る人が身の周りにいたら、その人に相談するのが一番良いと考える。また、児童相談所や精神科の病院もあるが、まだ親の中には拒否的な人も多いため、気を付けるべきである。

最近、親から「いじめ」で不登校になったという訴えが多くなっているが、この事は十分に配慮して受け止めることが必要である。

### (4) 担任を中心とした大人側ぐるみの対応が必要である

「不登校」というくらいであるから、子どもの休むきっかけはおおよそ学校にあると言っても間違いではない。だが、きっかけと原因や要因とを混同して考えてはいけない。あくまでも「きっかけ」が学校にあるという事である。

このきっかけについては、担任はきちんと把握しておかなければならない。だが、担任のせいでは子どもが不登校状態になってしまったという考えは良くないことである。もし担任に原因があるとすると、最低5名以上の不登校の子どもが続出するはずである。担任は不登校に対してあまり責任を感じ

ないで欲しい。その代わりに、休み始めた子どもにどの様に対応したら良いかということ、具体的に考えて欲しい。

一番初めにしなければならないことは、学年の先生や生徒指導の先生、養護の先生、校長先生、教頭先生など先輩や同僚にまず相談をしてみることである。絶対に一人で抱え込んではいけない問題である。

不登校の子どもが出ると、担任を除外して子どもや親への対応が進められる場合がある。これは良くないことである。子どもが元気になって帰って行くところは、自分の学級である。担任は責任を持って、自分が中心になって、様々な方々と「ぐるみの連携」をしながら、子どもの成長や改善のために努力をしなければならない。

### (5) 不登校についての特徴を熟知すること

子どもが学校へ行けなくなるという事はどういう事かという事を、子どもの側に立ってきちんと理解しておく、子どもやその親との対応に戸惑うことが少なくなる。不登校について理論的に学習をし、不登校の子どもをその理論に当てはめて理解し対応するという事は、子どもの心は無視した接し方になることが多い。

理論的に学習したことを、今自分の学級で学校を休んでいる子どもに、何がどの様に役立つのかという考え方の方が大切な事である。改善の道筋をまとめてみると次のようになる。

イ 不登校になると子どもは皆赤ちゃん返りをするものである

ロ 赤ちゃんに戻ったのだから、もう一度育て直しをすれば良い

0歳から6歳までは母親中心に家族ぐるみで育てる

6歳を過ぎたら先生も加わって育てるのが良い

ハ 子どもの心の育ち方は大まかに次のようになる

1歳前後の心の歩行自立

3歳前後の第一次反抗期

年中さんに成長

年長さんに成長

ニ 学童期に成長

ホ 登校する

これだけ頭に入っていると、子どもの心の成長

の節目をしっかりと認め、じっくりと成長を待つことができる。子どもは必ず心が成長して、現在の学年の年齢まで、しっかりと成長するものであると筆者は固く信じている。

さて、本節では不登校の改善の過程について、短い期間で元気になる子ども達と、長い年月を要して元気になる子ども達の特徴について述べてきた。両方とも元気になる過程は同じであるが、大きなステップで元気になる子ども達と、小さなステップで元気になる子ども達がいることについても述べてきた。

不登校の子ども達に接していると、人間の持つ命の素晴らしさをしみじみと感じさせられる。子どもの人間性を信じ切るところから、子どもとの関わりがスタートしていくことも実感として分かってきた。

不登校の子ども達を、「悪い子」と、大人は心のどこかで決め付けてはいないだろうか。不登校の子どもほど個性的で、誠実で、周りに気を遣い、自分

というものをしっかり持っている子どもはいないと思っている。

長い人生である。疲れた子どもがちょっと一休みして、また羽ばたいていくのを大人は暖かく見守り、応援してやりたいものである。

#### 謝辞

本論文は北海道教育大学旭川校、伊藤則博教授のご指導により、平成11年執筆させて頂いた内容の一部であります。

「不登校の家族カウンセリングの試み」と題した、中谷有紀子氏の学術論文(平成11年度北海道教育大学教育学部旭川校 生涯教育課程生活健康コース)の一部であることも付記します。

更には古川宇一教授の熱意溢れるお励ましとご指導により本論文の発表の場を頂きましたことを厚く感謝申し上げます。